

洛西ニュータウン

誕生から未来へ

二〇〇九年一月三十一日 於洛西支所

上田篤

1 建設省から京都大学へ

いまから四十四年もまえのことである。

この会場にはまだ生まれていらっしやらない方々もおられるかもしれない。わたしはそれまで十年間つとめていた建設省を辞して、京都大学に赴任した。

建設省では、わたしは公営住宅の建設指導やニュータウンの計画指導などを担当していたが、大学では都市計画をおしえることになった。

2 タスコの町の美しさ

それから一年ほどして、たまたま機会があつてメキシコのタスコという銀山の町をおとずれた。そうしてその町の美しさに魅入つてしまった。

いまだこそ本場イタリアやスペインの「山上都市」といわれる中世の古い町並をみる人もおおくなったので、メキシコのタスコなどは、とりたてていうほど珍しい町でもなくなつたが、とうじヨーロッパにいったこともなかったわたしはタスコをみてすっかりおどろいてしまった。

というのは、赤瓦屋根に白シッタイの家々が山にむかつて折りかさなるように建っているのだが、それらの家々の形はどれをみてもおもしろい。しかも一つとしておなじものがない。

またそれら家々をつなぐ道も折れたり曲がったりして変化にとんでいて、つぎにどんな光景があらわれるかもわからない。まるで迷路のなかにまよいこんだようである。

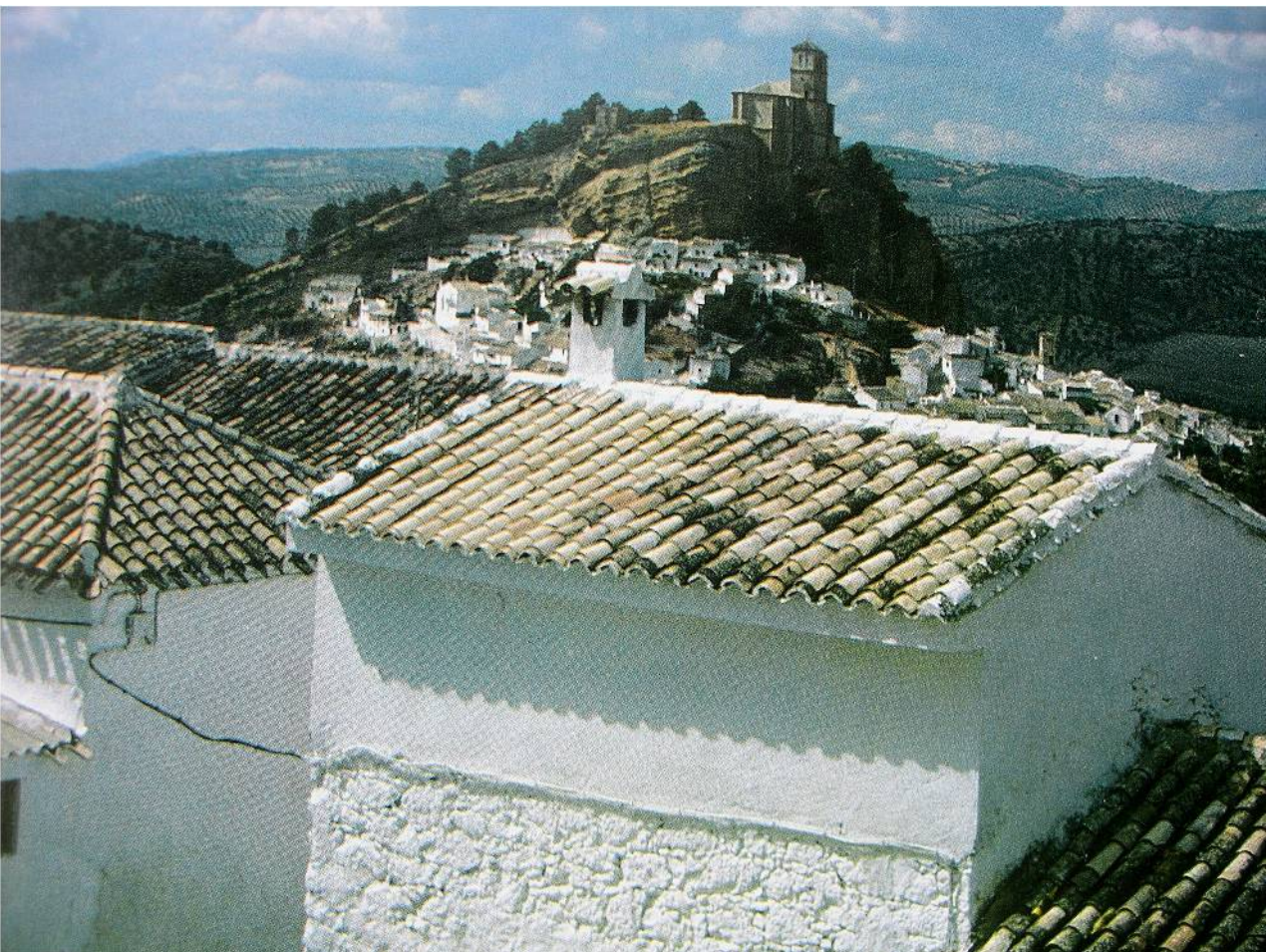
わたしは胸をはずませながら、白い家々のあいだを上へ上へとのぼつていった。

3 見えないアリアドネの糸があった!

町のいちばんたかいところに教会があった。その教会の尖塔にのぼると町が一望できた。

わたしはしばらくその美しい景色にみとれたり、写真をとったりしていた。

町のいちばんたかいところに教会があった(南欧の山上都市)

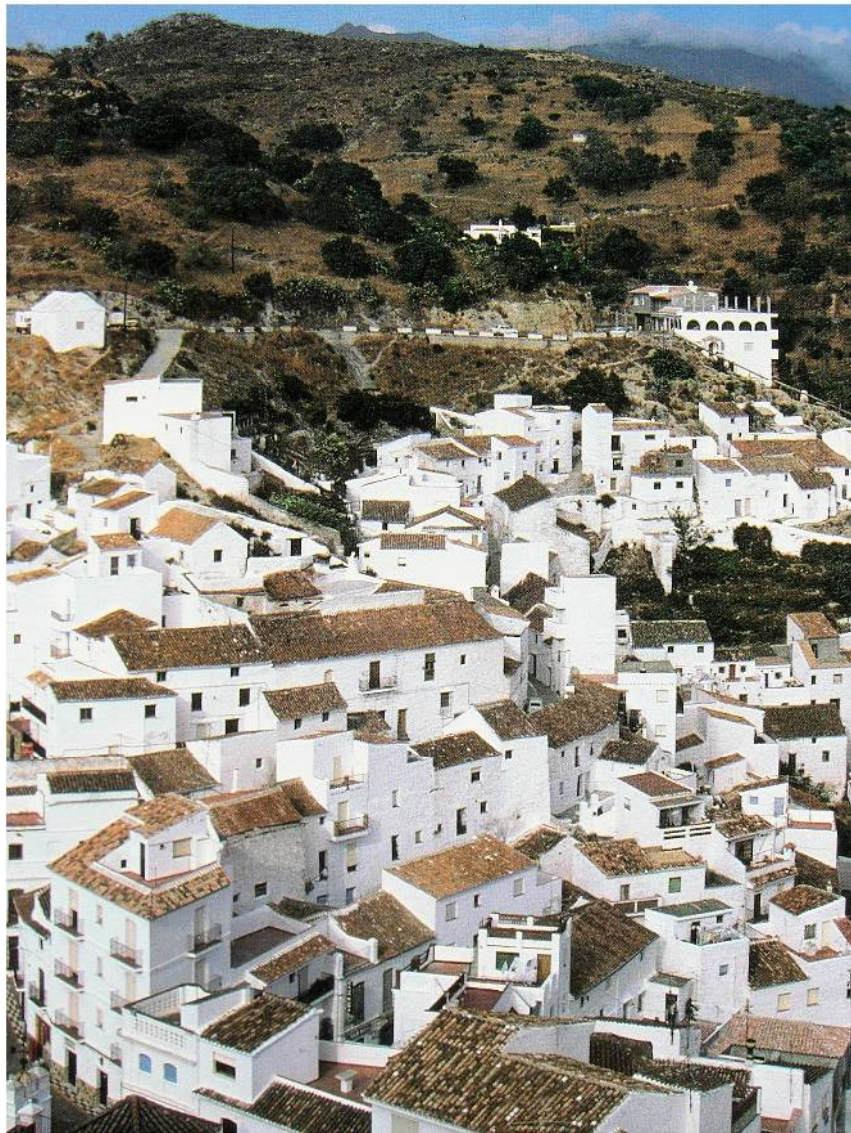


そのうちに、ふと「家々の窓がみな教会を向いていないか?」ということを「発見」した。しかもそれらの窓には花がかざられていたりしている。そ

ここで案内してくれた現地の人に「窓がみんな教会をむいているようだが、それはどうしてか？ だいたい、この迷路のような町の都市計画はいつたいていどうなっているんだい？」とたずねた。

すると、かれはニヤニヤしながら「そんなむずかしい都市計画などない。ただ家を建てるとき、そのうしろにある家の窓から教会をみる眺めをさえぎってはならないことになっているんだ」とこたえた。

教会を向いた家々の窓（南欧の山上都市）



「というのも、ラジオもテレビもない昔は、教会がいわば町の情報センターだったからだ。町でなにか事がおこったとき、まっさきに教会が合図をだす。人が死んだときには半旗をかかげる。異変がおきたときには黒い煙をだす。祭のときには鐘がなる。だから人々は朝起きたらいちばんに窓をあける。そして教会が無事であることをたしかめて一日の仕事にとりかかる。だから教会をみる、というのは、この町の人々にとっては命にもかかわるような大切なことなのだ。そういう人々の教会をみる視線を、あとから新しく家を建てる人はさえぎってはならない。そんなことをしたら町から放りだされる。この町には銀の採掘のためにいろいろなところからいろいろな人がきているが、みなカトリッ

ク信者だから教会をととても大事にしているのだ」とかれはいった。

それをきいてわたしはびっくりした。「なるほど、それであとから家を建てる人がいろいろ工夫をこらした結果、こんなに面白い家の形ができあがったのか！」

そしてつぎの瞬間、おもったのである。

「ああ、これはアリアドネの糸なのだ」。

古代ギリシャのクレタ島にあったというラビリントスという迷路の王宮にギリシアの英雄テーセウスが投げこまれたとき、恋人のアリアドネはテーセウスの服に縫いつけたというあの糸である。テーセウスが逃げかえるときその糸をたぐっていけば迷路であっても元の入口にたどりつく。アリアドネの糸は迷路を解くカギなのだ。

すると、これは「迷路の町の〈見えないアリアドネの糸〉ではないか？」

4 プルーイット・アイゴー団地はなぜ爆破されたか？

それからまた八、九年たった一九七四年のこと、世界の住宅計画や都市計画のうえで衝撃的な事件がおきた。アメリカのセントルイス市のプルーイット・アイゴー団地という二千戸ほどのアパートがある日、一挙に爆破されたからだ。

その団地の設計者は、九・一一のテロで崩壊したニューヨークの貿易センタービルを設計したミノル・ヤマサキである。ヤマサキは不幸なことに、貿易センタービルとプルーイット・アイゴー団地の二つの建物を爆破される、という悲運にさいなまれる建築家となった。

しかしプルーイット・アイゴー団地ができたとうじは、その幾何学的な設計の美しさによってアメリカ建築協会賞を受賞している。だがいまのべたように、建設されてから十九年目に、それはダイナマイトで爆破されてしまったのだ。

といても爆破したのはテロリストではない。なんと、それは建設者であり管理者でもあったセントルイス住宅公社自身だったのだ。

どうしてそんなことになったのか？

その答えは簡単である。

プルーイット・アイゴー団地では、なぜか犯罪が頻々としておきた。ためにしだいに住む人がへり、とうとう空き家率が七十パーセントをこえてしまった。しかも住んでいる人もたいてい麻薬患者か犯罪者になってしまった。

そこで公社はいろいろな対策を講じてみたが効果がなく、プルーイット・アイゴー団地はしだいに犯罪の巣窟になっていったのである。しかたなく、公社はプルーイット・アイゴー団地を消滅させてしまったのだ。

「なぜ犯罪が頻々としておきたのか？」という原因をしらべた建築家のチャールス・ジェンクスは、それを「団地の幾何学的設計のせいだ」という。

幾何学的に構成された団地は外部の人にもわかりやすい。ために犯罪をおかしても逃げるのがよいのである。

ダイナマイトで爆破されたブルーイットアイゴー団地



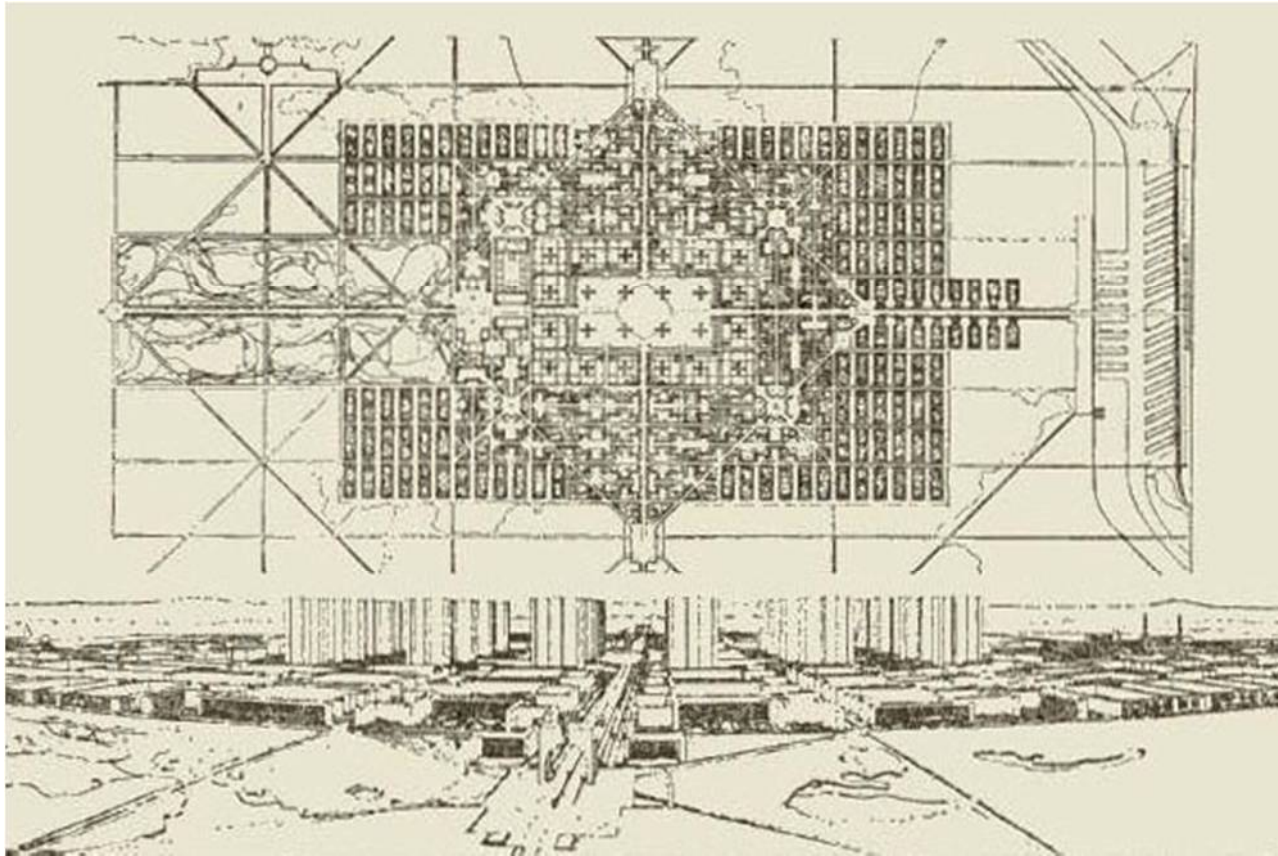
1974年7月15日 セントルイス市でブルーイットアイゴー団地がダイナマイトで爆破された。

(総戸数約2000戸、設計ミノルヤマサキ、米建築協会賞受賞。)

建設19年後にセントルイス住宅公社自身の手で爆破された。理由は、空家率70%、残り30%の大部分を麻薬患者が占拠し、犯罪の巣窟と化したため。

チャールズ・ジェンクスは、これ以後、機能主義時代が終わり、ポスト・モダニズムが始まるとした。

また幾何学的空間は人々の目のとどかない死角がおおい。南面には窓があるが東西の妻面はたいがいコンクリートである。そこで犯罪がおきてもあまり人目につかない。つまり明快ではあるが、半面、死角のおおい空間となってしまうのだ。それが犯罪を誘発したのである。



「300万人の輝く都市」1935年

全体計画は生物学的アナロジーに貫かれ、超高層のビジネスセンターを頭部にその下に文化センターの「心臓」、両側に住居地域の「肺」を配置し、都市の機能として「住居・労働・休養・運動」の4つが納められるとした。

ル・コルビュジエの理想都市

そしてそういう幾何学的空間の建築をさかのぼると、二十世紀はじめに建築家のル・コルビュジエが発表した「輝く都市」にいたる。それは中世の迷路都市バリエを近代的な幾何学的都市につくりかえることを提案したものだ。そして今日、おおくの近代国家ではそれを都市計画のバイブルとしてビルやアパートをたてている。

それについてジェンクスは「機能主義の時代はおわった。近代は死んだ」と告発した。建築におけるポストモダニズムという運動はここからはじまった。



鳩山内閣成立とともに、1956年以降都心通勤者のベッドタウンとしてニュータウンの開発が始まった。しかし、オープンスペースにもギッシリと住棟が建てられた。

しかし、ふつうにかんがえると迷路のほうが犯罪はおきやすいようにおもわれる。だがじつさいには迷路のほうが犯罪はおきにくい。というのも迷路では侵入者は勝手がわからないから犯罪をおこせない。それは侵入者が「どこからだれが見ているかわからない」という不安にたえず駆られることと「逃げ道がわからない」ことだ。

しかしそこに住んでいる人にとっては、迷路の空間で毎日生活しているからよくわかる。勝手知った世界なのである。すると迷路は、住んでいる人にとってはいわば「見えない城壁」なのだ。

5 洛西ニュータウンを迷路の町に！

タスコと遭遇していらいずっと迷路のことをかんがえていたわたしは、ある日、とうじ京都市長公室長でのち京都市長になられた今川正彦氏から、洛西ニュータウンの企画の相談をうけた。

というのも、わたくしは建設省にいたとき日本のニュータウン法ともいうべ

き「新住宅地市街地開発法」という法律の企画・実現にたずさわり、その実行にあたっていたからだ。そういうわたしは京都大学にきたものだから、さっそく京都市からお呼び出しがかかったのである。

それがとりもつ縁で、わたしは「洛西ニュータウンのマスタープラン」と「デザインポリシー」を作成することになった。

そのときはまだブルーイット・アイゴー団地が爆破されるまえだったが、タスコでの経験や、またアメリカの社会学者のネーザン・グレイザーの「ニューヨークと東京とをくらべると」という論文、さらにはおなじくアメリカの文明批評家のジェーン・ジェイコブスの『アメリカ大都市の誕生と死』などをよんで大いに共感していたので、わたしは幾何学的な都市より「迷路の都市」の実現にむけての研究をすすめていたのだった。

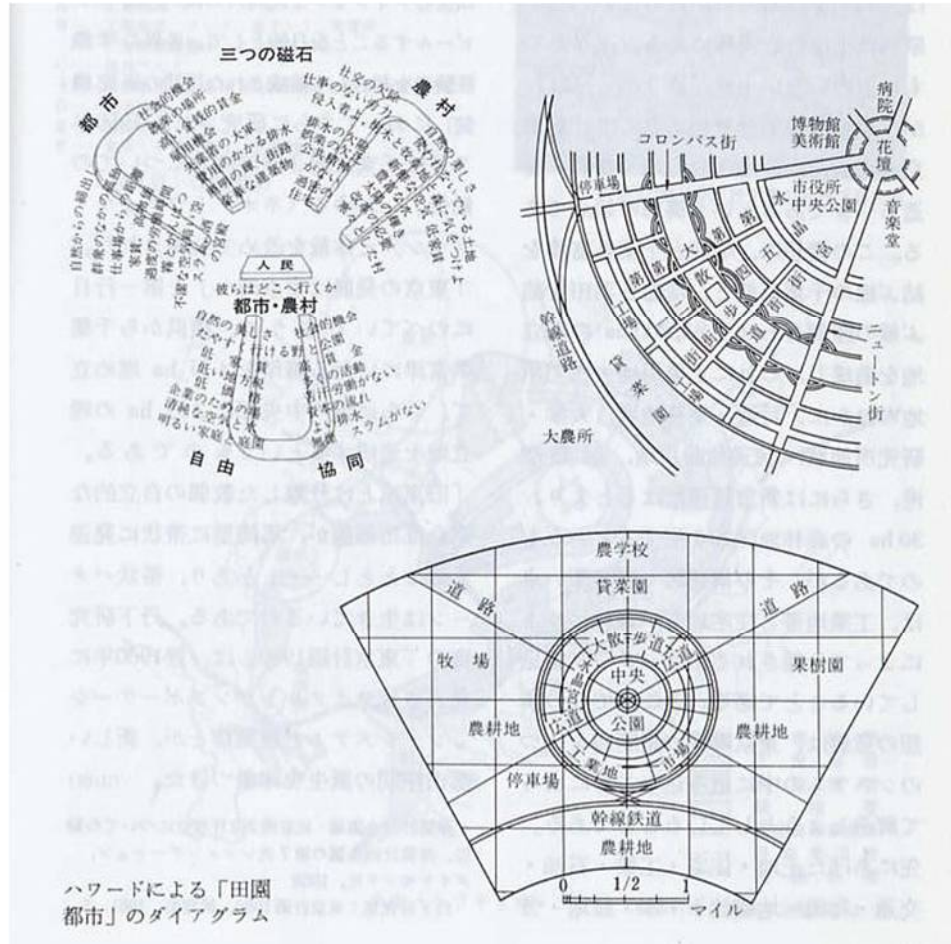
そこで洛西ニュータウンの都市計画の方針をたてるときにも「近代的な幾何学的な都市より、迷路のような変化のある町のほうがいいのではないか、そのほうが住民にとっても親しみやすく安心できるだろう」とかんがえたのである。以下、そのときの方針のいくつかをお話し、そういう方針にもとづいてマスタープランやデザインポリシーをつくった人間が三十年ぶりに町をおとずれてみての感想をのべて、わたしの責任をおえることとしたい。



洛西ニュータウン全体計画

田園都市の理想は次のとおりである。

- ①都市と農村の結合
- ②土地の公有
- ③人口の制限
(32,000人の小都市)
- ④開発利益の社会還元
- ⑤自足性
 - ・放射状配置の都市
 - ・中心部に広場・市役所・博物館などの公共施設
 - ・中間部に住宅・教会・学校
 - ・外周に工場・倉庫・鉄道
 - ・その外側に大農場・牧草地



ハワードによる田園都市のダイアグラム

6 森のなかのニュータウン！

そういう「迷路の町」を追求していたわたしは、まず、洛西ニュータウンを「郊外団地でなく、その名のとおり都市にしたい」とおもった。ニュータウンの発案者であるイギリスのエベネザー・ハワードにならって「田園都市にしたい」とかんがえたのである。ただしその田園都市を「迷路」にする。そうしてニュータウンとして一歩さきにすすんでいた「千里ニュータウンを追いこしたい」とおもったのである。



イギリスの田園都市



「森の中」の洛西ニュータウンのセンター地区

今回、ひさしぶりに洛西ニュータウンをゆっくりおとずれてみて、サブセンターの低迷など、若干問題はあるものの、わたしの夢のおおくがかなえられている現実をみることでできてたいへんうれしかった。

とりわけ、最初に車ではいったときの印象がよかった。

それはまったく、田園都市というより「森のなかのニュータウン」である。じつさい、こんなに緑のおおいニュータウンは、日本にはほかにないのではないか？

しかもタウンという証拠に、その森のなかに大きなタウンセンターがある。しかもそれはこのあたりにはみられないほど立派なものなのだ。わたしはしだいに興奮してきた。



小畑川に渡り鳥がいる

7 小畑川に渡り鳥がいる！

さらにニュータウンにはいる道すがら、いやでも目にするものに小畑川がある。

それはマスタープランの最初からわたしが計画の中軸にすえていたものだった。洛西ニュータウンを「川のあるニュータウンにする」ということだ。わたしは洛西ニュータウンを、川を中心にして、そこから周辺へとだんだんひろげていく思考方法をとっていた。

といっても川にかんしているならば、ことはそうかんたんではなかった。

京都の人なら保津川や桂川はだれでも知っている。しかし、小畑川という川は、じつはあまり知られていない。



小畑川に親水空間をつくる（川の流れに逆らわないように）

ところがこの小畑川は、小さいけれどたいへんな暴れ川なのだ。しかしその暴れ川は「日本歴史をかえた」とさえいえる。というのは、小畑川の下流にかつて平安時代初期の長岡京があったが、あつというまに廃都になってしまったからだ。それはふつうには「桓武天皇の弟で憤死した早良皇太子の怨念の恐ろしさのせいだ」などといわれるが、じつはこの小畑川の氾濫が原因ともかんがえられるからである。

だからこの小畑川をみて「川があつていいな、これを親水空間にしよう」などとのんきなことはいっておられないのだ。

じつさい日本のたいていの中小河川は雨のふらないときには、ほとんど水がながれていないが、雨が二、三日もつづくときそれこそ奔流になる。

そのときもわたしは、京都市の土木技術者から「堤防内においていくような

階段などをつくったら、その階段が新たな水の抵抗をよんで、川におおきな渦ができ、堤防が決壊しかねない」とおどかさされた。

話はとうとう建設省の河川局までいって、すったもんだのあげく「上田がやるなら」ということでやっと許可がおりた。わたしの提案した「護岸に水の流れにそった流線型の階段をつくる」という案がゆるされたのである。

ただし、それも全部ではなく一部にかぎられる。しかもそれらは「たがい三〇〇メートル以上をはなさなければならぬ」というものだった。

そうしてつくられた護岸の階段だから感慨無量のものがある。

ただいまそれをみると、その平面の線形は、わたしは曲線を主張したのにじつはおおくが直線になっている。それは日本の海岸のどの埋立地のデザインをみてもわかることだが、平面形がみな将棋の駒のように角々していることと共通している。日本の土木屋さんには、伝統的に曲線というものが頭の中に入らないようだった。もっとも最近では、高速道路の橋桁などをみても曲線がとりいれられるようになってきているので多少かわってきたとはいえるが……。

とはいうものの、こんな暴れ川である小畑川につくられた親水空間を、今日、ながめてみても、やっぱり「すばらしいものだ」とおもう。小畑川のご真ん中にいわば広場があるからだ。聞くと、その広場ではいろいろのイベントがおこなわれて、あたりはまるでお祭りのときの神社の境内のようになるそうだが、たしかにそんなところは日本にほとんど例がない。

ただ課題の一つは、このように「広場」が出現している小畑川の本流はいいのだが、それに注ぐおおくの小水路が親水空間になっていないことだ。しかもしばしば水は汚くよんでいて、あまり近づきたいとおもわない。むしろそこが親水空間になっていないから水が汚れるのにまかされているのだろう。「これらの小さな水路をどうするか」というのがこれからの課題である。

そこでわたたくしは一つ提案したい。「そういう小さな水路をどうするか」ということを洛西ニュータウンの高校生のみなさんにかんがえてほしいのである。というのは、おおくの川べりで高校生をよくみかけるからだ。たしかにそこは人目につかない、金もかからない、しかも気持ちのいい空間である。高校生のアジトになるのもむりはない。

そこでこれら小水路を活性化するために、高校生がちよっと階段のデザインをかえたり、草や木をうえたりする案をかんがえ、それが実現するだけでもすごおもしろくなるのではないか？

じつさい、日本人の居住環境において川は大切である。それは日本の町にはたいてい川があるのをみてもわかる。

すると「そんなことはあたりまえだ」といわれるかもしれない。しかしヨーロッパの町にはかならずしも川はない。小さな都市になるとないほうがおおい。

さきの山上都市などにはまったく川はない。

そのかわりにあるのは城壁である。ヨーロッパの古い都市は、たとえ小さくても城壁をもつものがおおい。

しかし日本には城壁でかこまれた町などない。かわりにあるのが川なのだ。ところがわが国の最初のニュータウンである千里ニュータウンには川がない。千里ニュータウンにしばらくすんだ経験のあるわたしは、いつもそこで、なんとなく日本ばなれした空間に違和感をおぼえた、といっていた。たとえば一人ボンヤリしようとおもったら公園にいかなくてはならない。しかし公園ではなかなか気分がおちつかない。そんなところで休んでいる人がいないからだ。それがここではちがうのだ。小畑川のそばでじっと川を見ている人をわたしは何人もみかけた。

さらに川には鳥がいる。しかも渡り鳥である。鳥がいるのは魚がいるせいである。小畑川には魚がたくさんいるのだ。ともあれ洛西ニュータウンは渡り鳥や魚がいるニュータウンになっている。「これはすごいことだ！」とわたしはおもった。

8 タウンセンターを立派に！

小畑川につづいてわたしは、マスタープランのなかでニュータウンのセンターとなるべきものを小畑川のそばにおくことをかんがえた。川のそばの商業センターである。川が、買物や食事にやってきた人々の心を和ませるからだ。

しかもその川のある商業センターは、タスコの町の教会のように、住んでいる人々の連帯のシンボルにならなくてはならない。町の人々が誇れるものでなくてはならない。京都の都心にも負けないほどのものでなくてはならないのである。

そこでわたしは、その商業センターにいくつかの広場をおくことをかんがえた。そうして「商業センターをタウンセンターにしたい」とおもった。物資だけでなく情報をも交換するのだ。

とうじ都市計画のうえでは「近隣住区理論」というものが支配的だった。人々の生活が人口八千ぐらいの近隣住区のなかで完結することを理想としたのである。

しかし、すでにそのとうじにおいてすら「近隣住区理論によってつくられたイギリスのニュータウンは失敗だった」ということがしきりにいわれていた。

というのは、石鹸やトイレトペーパーのような生活必需品ならいいが、食料品や衣料品などとなると、人はどうしても「たくさんのものなから自分の好みのものをえらびたい」おもう。そうなると品物のおおいところに人はあつまる。ために近隣住区内では日常生活が完結しないのである。

そういったことからイギリスのニュータウンでも、うまくいかなかった事例がたくさん報告されていた。

そこで洛西ニュータウンにおいては、商業センターを分散するより集中するようにした。とうじイギリスの幻のニュータウンといわれたフック・ニュータウンのワンセンター方式をとりいれて大きなタウンセンターをかんがえたのである。

ドラマのロケにも使われているタウンセンター



いっぽう、住区内にもうけるものはサブセンターとした。それは四つの住区に四つもうける。計画人口四万人の町だからだ。

そこでサブセンターでは生活必需品を中心とするものを販売する、そしてそ

れ以外の商業施設はなるべくタウンセンターにおくようにした。「タウンセンターが京都にも負けないようなものになるかどうかで、洛西ニュータウンの生死がきまる」とかんがえたからである。

さらにもう一つ、タウンセンターからはなれるにしたがってニュータウンの人口密度がうすくなるようにした。つまり高層アパートからしだいに戸建て住宅にかわり、そうして周辺の田園に溶けこんでいくような人口密度や住宅構成をかんがえたのである。それが自然の形だからだ。

さて今回おとずれてみて、タウンセンターのデパートや銀行、レストラン、喫茶店、ホテル、温泉、広場、大駐車場などといった建物や空間のりっぱさだけでなく、タウンセンターがこの不景気な時代にもかかわらず、とても活気があるのにおどろいた。住民の方々が、お洒落をしたりお化粧をしたりしてあつまってきたおられるのには涙がでるほど感激した。「京都の都心とかわらない風景だ」とわたしはおもった。

また、タウンセンターや公園などでゴミをひろったりするボランティアの年寄りがたくさんおられるのがとてもうれしかった。洛西ニュータウンでいちばんすばらしいことは「人々の町を愛する心ではないか」とおもったものである。

いっぽう、たしかにサブセンターはさびしかった。

しかしここいちばん、統制的・お役人的な発想をこえて、住民のみなさんが知恵をしばっているいろいろなかんがえれば、活気をもたせる方法はいくらでもあるのではないかとおもう。

わたしも、多少かんがえるところがある。

9 道路は地形にそって！

さて、都市計画で重要なのは道路網である。洛西ニュータウンのなかの道路をどのようにデザインするか？

洛西ニュータウンのあるこの土地は小畑川をかこむ丘陵地帯である。そのため起伏がさうとうあった。

そういう起伏のある土地で道路を幾何学的に配置するとなると道路のアップダウンがはげしくなり、それをなくすためには大規模な土地造成をやらなくてはならない。すると巨大な崖面があちこちにできてしまう。それが災害の原因になったりする。そうやって失敗した都市計画の例は古今におおい。

にもかかわらず、さきのル・コルビジユは「人は目的があつて動く。目的があつて動く道は直線にきまつている」といって曲線道路を排し、直線道路を推奨したのである。

まあそれもフランスのように国土が平らな土地だったら可能かもしれないが、

日本ではなかなかそうはいかない。にもかかわらず、とうじの日本の学生たちの建築や都市計画の図面はみな直線で構成されていた。

しかし、わたしはそれをやめた。

道路の線形は地形にそったゆるやかな勾配のものにすべきだとした。なるべく大規模な宅地造成はやらないようにした。そうすると自然の地形がたもたれ、災害の恐れもすくなくなる。土地利用上も有効である。

そこでル・コルビュジェをまねて「人は楽しみのためにうごく。楽しい道は曲線にきまっている」などといって学生をからかったりした。

その結果、洛西ニュータウンでは道路はほとんど曲線状になった。直線道路は敷地の周辺などわずかのものにすぎない。

そうして、町はしだいに「迷路」になっていったのである。

楽しい道は曲線にきまっている



10 幹線道路を緑のトンネルに！

その道路計画のなかで、幹線道路には歩道のほかに街路樹の敷地をもうけ、積極的に街路樹をうえるようにした。

その街路樹は、よく日本の都市の街路樹にみかけるように、やたら木の葉を剪定したり丸坊主にしたりするものではなく、木々をすくすくのぼしてヨーロッパの街路樹のように緑のトンネルをつくることをかんがえた。

そのために電柱は道路におかず、宅地内に電柱敷地をもうけて街路樹からなるべくはなすようにした。そうすれば大風のとき街路樹が電線を切る、という問題はおきにくい。

もちろん看板なども一切おかない。看板がないから、しげった木の葉で看板がかくれる、といった苦情もおきようがない。そこで街路樹をやたら剪定しなくともすむ。

「またどんな木をうえたらよいか」という京都市の質問にたいして、わたしは「サクラとケヤキとイチヨウなどはどうか」とこたえた。

それまでおおくの日本の都市の街路樹は、パリの街路樹をまねてなにかとうとマロニエやニセアカシアをうえたが、それをやめたのである。理由は風土にあわないからだ。

では、サクラやケヤキやイチヨウは風土にあうのか？

サクラは日本のどこにでもある。なかに東京のお堀端のものがりっぱだ。

またケヤキは仙台である。昭和二十四年ごろから島野さんという社会党の市長さんが、なんと二百メートルにもわたって電線を地中にうめられた。そのとうじ電線を地面にうめる、などということはすごいことだった。そうしてそこにケヤキをうえられた。電柱がないからケヤキはすくすくそだつてうつくしい樹形をつくり、たいそう評判になった。青葉通りや定禅寺公園通りである。

わたしもそれを見て、ほんとうに「いいなあ」とおもった。

さらにイチヨウは、大阪の御堂筋のイチヨウがとてりっぱだ。

そこで、洛西ニュータウンに東京、仙台、大阪の三つの町の評判の街路樹をもつてくることにする。

またこの三つの木は、春はサクラ、夏はケヤキ、秋はイチヨウといったように三つのシーズンにそれぞれ盛りをむかえる。「では冬は？」といえ、ケヤキの枯れ枝がともロマンチックだ。つまり洛西には春夏秋冬の楽しい並木道ができるのである。

さて、こんどおとずれてみて、とりわけケヤキがりっぱに生育しているのを見てたいへんうれしかった。こんな街路樹は仙台をのぞけば日本にあまりないのではないか？

ケヤキのトンネル。こんな街路樹は仙台をのぞけば日本にはあまりない



このように街路樹はなかなかいいのだが、しかし幹線道路にはじつは問題もある。

当初から洛西ニュータウンを地域と隔離した特殊地帯にするのではなく、周辺地域と分けこむことをかんがえていたので、ニュータウン内の幹線道路も市内の幹線道路と接続するようにした。つまりニュータウンをオープンにしたのだ。

その結果、いまニュータウン内の幹線道路の通過交通がばかにならない。山陰方面にむかう国道九号線が混んでいるので、洛西ニュータウン内の幹線道路を利用する車がおおいのである。

それはニュータウンをオープンにした以上、しかたのないことだろう。ただヨーロッパではフランスでもイギリスでも、人は田園地帯では車をすっ飛ばす。高速道路でなくても八十キロぐらいのスピードはふつうだ。

ところが、郊外をはしっていた車が町のなかにはいると、とたんにスピードがおちる。小さな町になると三十キロとか二十キロだ。そういうスピード制限が厳格におこなわれている。そのためのドライバーの意識も徹底している。であるから町のなかでは車がいつもノロノロである。



細街路と児童公園

しかしわが国ではそこまでの配慮が、制度的にも、またドライバーの意識のうえにもないせいから、スピード制限はいちおう四十キロになっているが、だれもそれをあまりまもらない。

洛西ニュータウンでも、曲線道路であるにもかかわらず車はどんどん飛ばしている。道路の幅がひろいから人は横断するのがこわくなる。これが直線道路だったら車はもっと飛ばすことだろう。

ただし道路を曲線状にしたためだろうか、補助幹線道路では通過交通があまりみられなかった。これは救いだつた。

またさらに、あらたな通過交通が計画されている、ときいた。この問題も、住民にもっとよく知らされて、みんなで真剣にかんがえる必要があるだろう。

いずれにせよ、通過交通問題はこんごの課題である。

11 居住者は細街路で迷わない！

いっぽうわたしは、住宅地の街区のなかの細街路は通過交通のないクルドサククといわれる袋状のものにした。すると、街区の出入口はたいてい二つか三つしかないことになる。



竹の里タウンハウスの中庭

これなら街区内の通過交通はおきない。また犯罪がおきても二、三か所の出入口をおさえてしまえば犯人は逃げられない。たしかに部外者は最初のうちとまどうだろうが、なればどうということはない。むしろ変化があつて快適なものになるだろう。

そういう趣旨は、現実によくまもられていた。街区では通過交通をぜんぜんみかけなかった。これなら洛西ニュータウンでは子供を道路で遊ばせてもすこしもこわくないだろう、とわたしはおもった。

じつさい、竹の里タウンハウスといわれる住宅地ではその点が徹底していて、細街路には車をいれないところをおくもうけている。そこでは、まるでタスクの家々のように白い住宅がたちならんでいろいろな変化をみせている。あちこちにランドマークになるような植栽をうえたり、また溜まりの空間やベンチなどをおいたりして子供たちがたのしく遊んでいる。

通りすがりの人間も、おもわず溜息のするような空間だった。



12 住区の中に小学校を！

洛西ニュータウンは、人口八千から一万ほどの四つの住区で構成される。それら住区の中には小学校がもうけられる。それは学校であるだけでなく、いざというときの住民の近隣互助センターにもなるから、住区のおかれる必要があるのだ。

じつさい、日本の小学校というのは、むかしから義務教育の場だけではなく、地震とか大災害のときには、人々は小学校に避難したり仮設住宅を建てて住んだりした。小学校で盆おどりや映画鑑賞などもおこなわれた。各種集會もひらかれた。いわば小学校は欧米都市の教会のような役割をはたしていた。あるいは日本のむかしの鎮守の森のようだった。いろいろな意味で、小学校は



森につつまれた小学校

地域のセンターだったのである。

というのも、子供をつうじて人々は連帯したからだ。タスコの人々がカトリックの信仰で連帯したのに似ている。そういう住民の連帯を、いまここにきてやめることはないとおもう。災害のことなどかんがえればなおさらである。

また小学校は、そこですごした人々にとつての一生の思い出になるものだから、どこにでもあるようなエコノミック・ボックスの校舎ではなく、建物に屋根をもうけるなどして個性的なデザインとする。また校庭は緑にかこまれ、山が見えるようにしてほしい、とねがった。

今回、そういったわたしの思いのおおくがかなえられているのをみた。

ただ欲をいえば、いくつかもうしあげたいことがある。

たとえば校庭に井戸がほしい。大地震がおきたときなど、いちばんこまるのは水道が止まることだからだ。

そういったときに役立つ井戸を小中学校にもうけたい。そして日ごろから生徒たちが井戸の水を積極的につかうのである。井戸の水は、つかえばつかうほどいい水があつまってくるものだからだ。逆につかわなければわるい水がたまる。そこで、水質検査なども生徒が理科の時間などにやればよい。

また、その水をつかって校庭の一隅に小さな林をつくって池をほりたい。そうすれば虫がくる。鳥がくる。モモンガーなどの小動物もやってくる。校庭の一隅がビオトープになる。自然の生物社会になる。生徒たちにとっては格好の自然教材ではないか？

それからまた小学校の校庭をみていると、放課後の生徒の利用がすくない。学校の先生としては放課後まで生徒の管理責任がおえないから、授業がおわったら生徒たちに早くかえってほしいのだろうが、それなら老人クラブなどと提携して、たとえば午後五時までは老人たちがグラウンドで小学生といっしょに遊んだらどうか？

むかしから老人と孫とは仲がいい、と相場がきまっている。それを社会的に復活するのである。

13 小学校をむすぶ回遊緑道を！

さてマスタープランでは、それら四つの小学校と一つのタウンセンターをむすぶ回遊式の緑道をもうけた。いうまでもなく子供たちを交通災害からまもるためだ。

もちろん緑道は大人たちにとっても買物や散歩に便利である。

そしてそれらはりっぱに維持されていた。

ところどころに自動車が通るところと平面道路と交差しているところもあるが、ほとんどは立体交差である。であるから親は安心して子供を学校にいかせることができる。交通事故はほとんどないということになる。

じつさい、こんなに通学路が安全で快適なものは日本にはまずない、といっている。わたしは大満足だった。

ただし、少々、欲張った意見をいわせていただければ、もうすこしベンチがほしい。お地藏さんなどもほしい。木には名札がほしい。また、もっとかわった木や草花がいろいろあってもよい。

また通学路となる緑道は、生徒たちが道草をするところである。そこで「道草をできる緑道にしたい」とわたしはかんがえる。

というと、塾の先生やお母さん方にしかられるかもしれないが、かんがえてみると、子供のときの道草は楽しかった。そこは、大人も教師もいない子供ど

うしの世界だったからだ。友達といろいろ話をしてあそんだ。花や虫のことをみんなで議論した。ときには喧嘩したりもした。そうして大きくなっていった。

通学路の緑道



そこで、子供たちが楽しく道草ができるように、また大人たちにも緑道が便利に利用できるように、ベンチや、お地藏さんや、木の名前や、またかわった樹木や草花などを小・中学生がつくってはどうか？小・中学生がつくったベンチのデザインがかわっているのはほほえましいし、新しいお地藏さんのデザインなどがあったら、なお楽しいだろう。また生徒たちが卒業するときにはぜひ記念樹をうえていってほしい。そしてときどきはかえってきて、その記念樹の成長ぶりを見てほしい。

すべからく「緑道は小・中学生の自主的管理にゆだねたい」とわたしはおもった。

14 公園は回遊緑道のへびタマだ！

長年の観察や経験から、わたしは日本では欧米のような公園利用はなかなかおこなわれにくい、とみている。

欧米の公園はパークとよばれるように、それは自動車のパーキング場とまったくおなじものなのだ。お年寄りがよく公園のベンチなどで本をよんだりしているが、それはいわばパークしているのである。

日本でもお年寄りがふえてきたが、まだそこまではいっていない。

公園のベンチで日向ぼっこなどをしてしていると、近所の人から「あの人はどこか身体でも悪いのではないか？」などとおもわれたりする。

それより、日本では回遊式庭園に人気があるように、老人でもぶらぶら歩きをこのむ。犬をつれて散歩するのが大好きである。

そこでわたしはかんがえた。「公園も回遊緑道の一部にする」ということだ。へびが卵をのんだように、公園のところだけはいわば回遊緑道がふくらんだような形にする。つまり公園も回遊緑道の一部の、いわばへびタマだ。洛西ニュータウンの公園はだいたいそういうへびタマになっている。いいかえると公園はみな回遊緑道でつながっているのだ。

そうすると、現実に回遊緑道があるいて疲れたせいとか、公園でやすんでいる人をしばしばみかけた。わたしの目論見が成功しているようにおもえたのは、我田引水だろうか？

また緑道にそってアパートの庭やそれに付属した児童公園があるが、これがまたいい。

というのは、朝、子供を学校におくりだしたあと、お母さん方が児童公園にあつまっている風景をしばしばみかけたからだ。「なにをしていらっしやるのか」というと「井戸端会議」である。これが非常に大切なのだ。なぜなら、そこで住宅地内のいろいろな情報が交換されるからである。つまり子供をつうじて自然に近隣のコミュニケーションがおこなわれているのだ。

このニュータウンにやってこられる方々はみな新住民であって、あちこちからやってきておたがいにはなにも関係がない。出身地も、職業も、勤め先も、言葉もみなちがう。そういう人たちがここで仲よくくらししていくためには、おたがいによくしりあうコミュニケーションがなければならぬ。それが、子供をつうじて自然にできあがっているのである。子供を学校におくりだしたあとの児童公園の風景がそれなのだ。

子供を送り出したあとお母さんたちが児童公園にあつまっている



じっさい「みなさん町内会にあつまりました」などといっても人々はなかなか親しくはならないだろう。それはそれで大切な集まりだが、どちらかというと義務的なものであって、ほんとうに親しくなるのはこのように子供をつうじての自然の集まりによってである。そういう役割をこの児童公園がはたしている、というのを発見して、わたしはたいへんほほえましくおもった。

さらに、公園がりっぱだった。
たとえば境谷公園ではだれの設計かわからないが、饅頭をふせたようなゆるやかな芝生の頂上部にカシの木が六本あるのがすごく印象的だった。
夕暮だったから、その木陰から西山の小塩山に夕日が真っ赤にしずんでいくのを見て「これはすばらしい」とおもった。

境谷公園と夕日の小塩山



『風と共に去りぬ』のなかで主人公がさいごに「タラの丘にかえりたい！」とさげんだ、あのアイルランドの聖地のタラの丘をおもいだした。タラの丘にたつとアイルランドの平野が一望できる。どうようにこの境谷公園にたつと洛西の田園が一望できる。こんなタラの丘のような公園があることを「日本中の



大蛇ヶ池の「巨石群の庭」

人に知らせたい」とおもった。

また大蛇ヶ池では、放り出された多数の巨石におどろいた。京都の市中には「いかにもデザインしました」といったような石の庭がおおいが、ここではデザインなんかまったくおかないしに多数の巨石が放り出されている。それが庭なのだ。そういう「巨石群の庭」には感動した。そうして南斜面のゆるやかな汀にたってみて「ここにトンボやホタルなどがとんでいるのを見たい、動物学者たちと相談して池に水草などをうえるなどトンボやホタルがくるビオトープを出現させたい」としみじみおもった。

大蛇ヶ池が、トンボが池、ホタルが池にかわるのだ。わたしの夢かもしれないが。

15 工夫と丹精をこらす家々の緑

さて一戸建ての家々である。

それはさききのべたように、だいたいニュータウンの周縁部に配したのだが、じっさいにあるいてみると、それらは周囲の田園地帯にとけこんでいってとても自然な感じをうけた。

またそれらの家々は、たがいに建物のデザインをきそっているだけでなく、植木や垣根などにみなさんが工夫と丹精をこらしているのがとてもおもしろく、かつ、うれしくおもった。

手入れのゆきとどいたマツやモミジなどがたくさんあった。

手入れの行き届いたすまいの樹々



植木や垣根に工夫と丹精をこらして



ガレージの屋根の上をおおいかぶさるように大きくかたむいているキンモクセイの樹形をみて「よく木の性質を知っておられるな」と感心した。

カキの実がいっぱいになっているのも「みんなうらやましくおもってとおるこただろう」などと勝手に想像したりした。

さらに、迷路的になっている住宅地のアイストップ、つまり突き当りに独立樹をさりげなくおいているところがあって「なるほどこれは目印になっている」と感心した。住民のみなさんは、人にはしられない暗号やランドマークを各所においておられるのだ。



住宅地のアイストップ（突当りの目印）



ランドマークとしての樹木

こういう家々のりっぱな木々は、あるく人にとっての楽しみであり、目印になり、また夏には木陰にもなったりして住宅地ぜんたいのいわば財産である。これらを洛西ニュータウンの名木に指定して、落葉カキをするときなどには、住民が目をきめていつせいにおこないたいものだ。

またあまりいい例ではないが、コンクリートブロック塀がずらつとならんでいるところがある。たしかに景観的にはブロック塀はあまりほめられない。「これをどうするか？」

わたしは、いちどブロック塀のコンクリートをやってはどうか？とおもっている。各人が工夫をこらしているいろいろやってみるのだ。そんなにお金をかけなくてもできるだろう。

ばあいによっては業者がコンクリートをおこなってもよい。場所をかりて一定期間、新しいブロック塀のデザインを展示するのだ。業者にとってもPRのチャンスである。そういったこともかんがえてみてはどうか？

そうすることによって、ように住宅地の地価をたかめるのである。というの、人が住みたくなくなるようにつくしいところの地価は上昇するからだ。イギリス人たちはみなそのことをかんがえているから、おたがいに変なことをゆるさない。住宅地の地価があがると、たしかにその分だけ税金もあがるが、それはどうじに人々の財産があがることを意味しているのである。

そうして関西でみんなが住みたくなくなるような住宅地は「芦屋か、洛西か」などといわれるようにしたいものだ。そうすると、洛西ニュータウンをはなれていった若者たちもかえってくるだろう。

さて、集合住宅では、四階、五階にもたくさん人がすんでおられるのには感心した。

このごろではエレベーターのない公営住宅や公団住宅の四階、五階などは、上がり降りがないへんだからあまり人がすんでいない。空家がふえてきている。であるのに洛西ニュータウンではまだまだ四階、五階に人が住んでおられる。それは、どうやら洛西ニュータウンが気にいっておられるからで、階段の上がり降りが少々しんどくても、よそへゆく気にはならないのだろう、とおもった。有難いことである。

しかしわたしは、やっぱり年をとればエレベーターのないアパートはだんだん住めなくなる、とおもう。なんとかしなければならぬ。

公団はなにかをかんがえておられるのだろうが、廊下式でなく階段ホール式のアパートでのエレベーターをつける方式をもっと積極的に研究してみるべきだろう。ばあいによっては、おもいきって南面のバルコニーにミニ・エレベーターを設置することも検討してはどうか？

こんごの課題といえよう。

16 竹林公園を鎮守の森に！

さいごに、竹林公園について一言のべたい。

洛西は竹の産地である。

洛西ニュータウンの土地の買収がはじまったとき、この竹林が問題になった。はじめは、かなりのものがつぶされる運命にあった。

そのとき「竹博士」といわれた京都大学でわたしと同姓の上田教授が保存をつよく主張された。

わたしもそれに賛成した。洛西が京都に負けないものの一つにこの竹があるからだ。それをつぶしてはならない。

その結果、かなりの竹林がのこった。ニュータウン内にも、今日、中央緑地として竹林がのこっている。

そこでわたしは提案したい。

洛西ニュータウンはすばらしいが、しかし大きな問題点の一つあげるとしたら、ここには神さまや仏さまがぜんぜんおられないことである。

それはここだけの問題ではない。日本の住宅団地やニュータウンには神仏はゆるされないのだ。

わたしはながらく「それも仕方がない」とおもっていた。

ところがあるときイギリスを旅行して、ニュータウンの元祖である、さきのハワードの田園都市のレッチワースをみておどろいた。なんと田園都市の中心部に教会があるのだ。社会主義者のハワードは教会をつくっていたのだった。

そんなことは、日本の都市計画のどの教科書にも書かれていなかった。

しかしいわれてみれば、かれの『明日の田園都市』という本のなかにはちゃんと教会が描かれていた。日本の学者や建築家や行政官たちはみなそれを見なしていた。あるいはかくしていたのかもしれない。

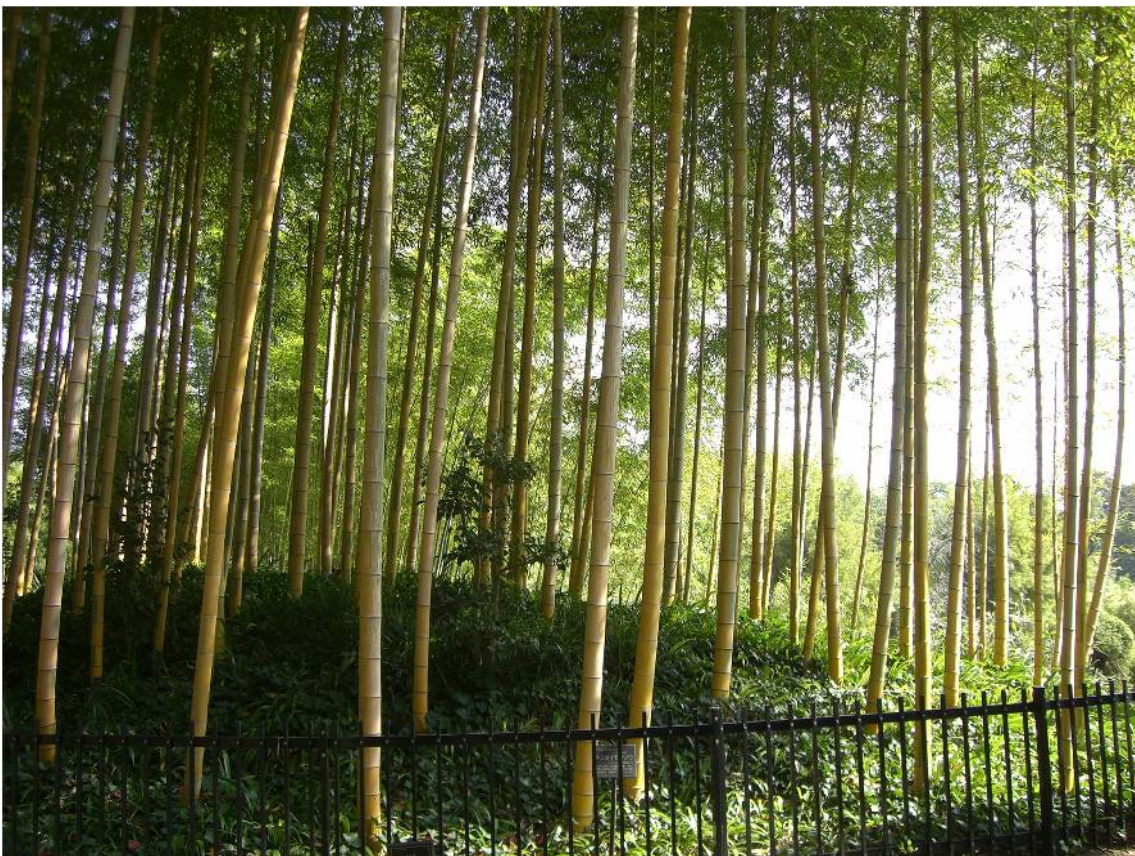
昭和三十年代に、とうじ大きな住宅地だった大阪府営の香里団地で、住民たちが「地蔵盆のためにお地蔵さんをおきたい」と大阪府に陳情したことがある。

しかし府はそれを拒否して社会的問題になった。結局、お地蔵さんはおかれなかった。

いうまでもなく地方にでかけるとわかることだが、日本の村々にはかならず鎮守の森がある。それはながいあいだの村人たちの信仰対象であっただけでなく、村人の精神的支柱であり、また連帯のシンボルでもあった。村の取決めはみな鎮守の森のまえでおこなわれたし、文書はみな鎮守の森の神さまに奉納された。そして鎮守の森の祭によって人々はたがいに結束した。日本の村や町は、鎮守の森なしにはその千年、二千年という命はつづかなかった、といえるのではないか？

戦後、祭政分離ということ、そういったことは忌避された。

竹林公園を鎮守の森に！



しかしそれは役所だけのことで、じっさいにはいろいろのことがおこなわれている。都会だって、神社の祭はいまだに盛んだ。

しかし、役所の経営する団地やニュータウンでは、あいかわらず神さまが忌避されてきた。このごろ、たまたに地蔵をおくことだけは見過ごされるケースがあるぐらいだ。

そこでわたしは提案したい。

洛西ニュータウンのなかにある竹林公園を「鎮守の森」にするのだ。「鎮守の森」という名前が嫌だ」というのなら「命の森」でもよい。

ただそこで洛西ニュータウンの永久の安寧をいのって、毎年、竹がいちばん生育してうつくしくなる六月に祭をおこなう。

祭には神さまが必要である。では、それはだれか？

わたしはかぐや姫にしたらいいとおもう。

かぐや姫はいうまでもなく『竹取物語』の主人公である。実在した人間ではない。あるいは天女か神さまかもしれないが、しかし、そんな天女や神さまをまつている神社は日本中に一つもない。

そこで京都の竹の里である洛西ニュータウンとしては、かぐや姫をまつる。そしてその祭をおこなう。

そのために毎年、小中学生や高校生がかぐや姫の絵や彫刻をつくって奉納する。あるいはだれかがかぐや姫になってニュータウン内を神輿にのってまわる。みんながそれを見に行く。そしてタケノコをたべて、ニュータウンの安全をいのり、人々の結束をはかるのである。

じっさい竹は地震などの災害につよい。竹藪は洛西ニュータウンの鎮守の森にふさわしい。洛西ニュータウンのシンボルといってもいいのだ。

来年の旧暦の暦をみると、六月二十六日の土曜日は満月である。そのとき、ぜひ「かぐや姫祭」をやってもらいたい。竹林公園にはホールもあるから、雨がふったっていろいろの行事をやることができるだろう。

17 公共交通をかんがえよう

さいごにのべたいことが、もう一つある。

じつはむかし、洛西ニュータウンとはべつに、わたしは京都市から市の地下鉄計画をたてることを依頼されたことがある。

そこでわたしは地下鉄路線の基本線型を、京都の地図の上に「丸に十字」と描いた。その十字の横棒をのばして六地藏から洛西まで延伸した。その結果、今日、「丸」の環状線は実現していないが「十字」は完成し、延伸部分は六地藏までできあがっている。

しかし洛西はまだである。

だがそれを完成させることは、もちろん洛西ニュータウンのためもあるが、かならずしもニュータウンのためだけではない。それは京都のためでもある。

なぜなら、京都は都心だけが京都ではないからだ。たとえばどの観光ガイドブックをみても、伏見ものついでいれば、山科もある。嵯峨野もあれば、洛西もある。それらが一体的となったものが京都なのだ。

じっさい京都といえど東山が有名であるが、じつは西山も東山にまけないくらいにうつくしい。しかしその良さはほとんど知られていない。

西山も東山に負けないくらいに美しい



そこでそういう京都の一体性をたもつためにも、地下鉄のような公共交通機関をぜひ完成させてほしい。それは今日の財政事情をこえた京都市の歴史的な課題である、とわたしはかんがえている。その実現にむけて洛西ニュータウンの住民三万のみなさんは、すくなくとも三人ぐらいの市会議員を市議会におくってほしい。そうすればかならずできる、とわたしはおもっている。

いろいろのことをのべてきたが、なかに見ちがえたり、聞きちがえたり、あるいはおもいちがいをしたりしたこともあっただろう。間違いがあつたらおゆるしいいただきたいが、以上をもって洛西ニュータウンのマスタープランの説明と、今回、わたしが見てまわった洛西ニュータウンの感想といたしたい。

了